

邪馬台国はその後どうなったのか

それは「記紀」から読み解ける

田口 紘一

はじめに

『魏志』倭人伝（以後、倭人伝と表示）に記されている卑弥呼の死は三世紀半ばのことである。そして、奈良盆地東南部の纏向遺跡が突然出現したのが、二世紀末から三世紀初頭のことである。大型墳墓である前方後円墳の出現も、この遺跡の周辺から始まり、ヤマト王権の成立もこの時代とみなされる。さらに、二世紀以前に西日本を統一した国家がなかったことは、考古学的にもほぼ証明されている。

そして、邪馬台国のその後については、正始八年（247）、卑弥呼が帯方郡に使者を送り、狗奴国との抗争を伝えた。郡はそれに応じて、塞曹掾史という身分の張政という男を使節団長として倭国に派遣しているのだが、倭人伝ではその働きが詳細に記されていない。つまり、張政は、詔書・黄幢を難升米に拝仮し、檄をもって告諭した。以て卑弥呼が死に、径百歩の冢を造り葬った。更に男王が立ったところ、國中不服で相誅殺し、千人が死んだ、そこで更に年十三の台与を卑弥呼の宗女として立ったところ、國中定まったとあるが、肝心の狗奴国との抗争の結果は記されていない。しかし、張政らの帰還に際して、二十人もの大夫を臺（洛陽の皇帝の宮殿）まで派遣して、お礼をしているので、狗奴国との抗争は上首尾におわったのではないかと想像はできるが、それ以上のことは、倭人伝からはわからない。

張政の使命

正始八年、卑弥呼が狗奴国との窮状を訴えてきた。帯方郡太守王頎は対処をどのように考えたのだろうか。倭国の南にあるという狗奴国が強国であるとする、当時、魏と対峙していた呉と連携しているのではないかと疑いが生じる。とすれば、これをほっておくわけにはいかない。ぜひとも、狗奴国を征伐せねばならぬところであろう。王頎は実力本位で派遣者を選んだ。すでに軍師と認められた人物の一万二千余里という遠絶で蛮夷の地への派遣は、そのプライドを考慮すると好ましくない。募りに応じて選ばれたのが塞曹掾史の張政だと思ふ。軍師を志している若者だったろう。張政は、魏の全権を任された軍師として派遣されたと考えられる。倭国側から救援を帯方郡に願ったのであるから、倭国も張政の指図に従うことは承知していたはずである。多くの人々、張政は単なる相談役のように理解しているように見えるが、それは間違いだと思ふ。

張政は何を考えたであろうか。まず考えられることは、女王卑弥呼の更迭である。卑弥呼は鬼道、すなわち占いで物事を決めているという。これは許せない。張政の進言を占いで実行・不実行を判断されてはたまらない。また、ここまで倭国を劣勢に導いた責任も取っても

らわねばならない。更迭は必須である。大事なことなので、出発前に帯方郡太守王頌の了解をとっていたかもしれない。したがって、最初に難升米に告諭した檄は「卑弥呼更迭」だったと考える。卑弥呼の死は張政の発した檄である。難升米に告諭したのは、卑弥呼は共立された女王だからである。告諭は共立者に出さねばならない。また、次の男王を立てたのも、その次の台与を立てたのも張政だと考えられる。

この卑弥呼更迭・男王擁立が張政によるものという考えは、森浩一氏（『倭人伝を読みなおす』筑摩書房、2010年）によると、すでに市井の古代史研究家阿部秀雄氏が発表しているとのことである。その後、奥野正男氏も主張している（『奥野正男著作集 I 邪馬台国はここだ』梓書院 2010年）。奥野氏は、「魏の冊封体制から脱して独立をはかろうとした鮮卑の軻卑能は、幽州刺史の王雄の送った刺客に殺され、その弟が立てられたという例がある」「倭国だけが駐留している郡使の意を介することなく倭国の首長らの意志で王が立ったなどと解釈することは、原文の恣意的な読みかえであり、『三国志』が示す魏と東夷諸国の冊封関係をゆがめることになる」と言っている。また、私の考えでは、ある男が自分で王となろうとしたのなら、王位に就く前に騒動が起きるはずである。王になってから騒動が起きるなど考えられない。宗女台与の就任にしても、騒動中に誰が擁立したのだろう。擁立運動が起きたとしても男王がすんなり引くとも考え難いのである。それは権力のある誰かが命じなければできないことだ。

さて、張政は、どのような戦略を立てたのか、誰を男王にしたのか、あるいはその次に立った台与はどのような女性だったのか、そして抗争していた狗奴国はどうなったかは、魏志倭人伝からは読み取ることはできない。

「記紀」および考古学的知見の活用

もし、狗奴国との抗争の結果が、後のヤマト王権の成立に関りがあるのであれば、それは『日本書紀』『古事記』（以後「記紀」と表示）の記述に現れていると考えられる。またそれを裏づける考古学的知見も重要である。

「記紀」には、卑弥呼の卑の字もでてこないという考え方もあるが、『古事記』の著者太安万侶は、稗田阿礼が誦習した「帝紀・旧辞」を文章化したのが『古事記』であると、序文で記している。したがって、「記紀」には、そのもととなる「帝紀・旧辞」があつて、それは、列島に残存した種々の伝承をもとに、ある時、皇室で、天皇家が倭国の権威者であることを正統化するために、成立させたものと考えられる。

だから、「記紀」は、天地開闢からはじまり、神々の出現、天地創造、天照大神のスサノオとのウケイ（誓約）、天孫降臨、神武東遷、ヤマト王権の成立と、同じあらずじで、よくまとまっているのである。

したがって、「記紀」の物語は伝承そのものではなく、実在人物の活動を神話化したり、都合のよくないところを一部隠蔽したり、あるいは省いて別の話のようにしたり、事実とはかなり異なった物語になっているかもしれないことに留意しなければならないだろう。また、その解明には「記紀」（「帝紀・旧辞」）を作った意図も考慮しておかねばならない。

まず、「記紀」において、関係のありそうな記事を挙げてみる。

筑紫洲の四つの面

『古事記』には、筑紫洲は「身一つにして面四つあり、面毎に名あり、故、筑紫国は白日別と謂い、豊国は豊日別と謂い、肥国は建日向日豊久士比泥別と謂い、熊襲国は建日別と謂う」とある。ここで気づくことは「日向国」が無いことである。そして、肥国の別名がなんともややこしい。最初の二文字「建日」は、熊襲国の建日別と同じであるから、熊襲と関係ありそうで、その次の「向日」は日向と関係がありそうで、つぎの文字「豊」は豊国に関係がありそうだ。つまり、肥国は熊襲・日向・豊国に関係があるのかもしれない。

筑紫国

私は、卑弥呼の支配した女王国は筑紫国だと考えている。邪馬台国北部九州説である。その地域は、弥生中期に甕棺墓制を敷いた一族の支配地域だと考えている。それは福岡平野・筑紫平野（筑後・佐賀平野）・糸島地方・唐津地方に及ぶ。遠賀川流域の直方平野は飯塚市周辺だけである（「九州の甕棺」藤尾慎一郎ホームページ）。

豊国

瀬戸内海航路はかなりの人が干満の潮の流れが激しく、暗礁もあり、難しい航路だという。しかし、これを克服できれば大きな利益を得ることが出来る。関門海峡と来島海峡を抑え、瀬戸内海航路を独占したのが豊国だったのではないか。「記紀」神話においてイザナギ・イザナミの国造りに、淡路洲・小豆島・吉備子洲・大洲・伊予二名洲・女島（小豆島・女島は『古事記』にのみ記載）がでてくる。大洲を来島海峡のある大島あるいは大三島、伊予二名洲を愛媛県松山市（市内にエヒメ二名神社がある）、女島を姫島とすると、これらの島を寄港地として占有すると瀬戸内海交易を独占できる。島の港は占有・防御が容易である。豊国が文字通り豊かな国であったとすれば、瀬戸内海交易を独占していたからと考えることが出来る。また豊国という好字の国が「記紀」という天皇家が創った歴史書に記されていることは、この国が天皇家と全く無関係の国とは考え難く、豊玉姫など豊の名の付く姫も多く登場することから、むしろ天皇家と密接な関係のある国と想定される。また、「記紀」に瀬戸内海のこれらの島々を記した理由もこれで理解できる。

豊国と投馬国

倭人伝に登場する投馬国は官を「ミミ」といい、副を「ミミナリ」というとある。この「ミミ」はおそらく実名ではなく、権力者の称号だと考えられる。この「ミミ」は「記紀」に「カミヌナカワ耳」（綏靖天皇）、「カミヤイ耳」「タギシ耳」と出現し、聖徳太子は「ウマヤドノ豊ト耳」と「豊」と「耳（ミミ）」の両方が入っているのである。豊国は投馬国であり、さらに天皇家の出自の国である可能性を示唆すると考えられる。

イザナギ・イザナミの生んだ神

イザナギ・イザナミの二神は天下の主として、天照大神、月の神、スサノオを生んだ。そのうち天照大神と月の神はひかりうるわしかったので天上にひきあげ、スサノオは荒く残忍な

ので根の国に追いやることにした。この三神は誰を表すのか。

天照大神＝卑弥呼・台与説

天照大神は天皇家の始祖神として伊勢神宮に主祭神として祀られている。天照大神が天皇家の始祖的人物の誰かをモデルとしているのならば、それ以上の祀られる理由を説明する必要はないが、造作された架空の神像だというのであれば、なぜ今もなお、祀られているのかを説明せねばならず、それは難しい。実際そのような説明を聞いたことがない。

天照大神を倭人伝に登場する卑弥呼と台与に比定する説は、白鳥庫吉、和辻哲郎、黒板勝美（以上東京大学）ら、最近では安本美典氏（『邪馬台国はその後どうなったのか』廣済堂出版、1992年）など既にかなり多くの人が唱えている。

それは、天照大神がスサノオとの争いで天の岩戸に隠れた（死んだ）のち、再び現れたと記されていることと、卑弥呼が狗奴国との争いのさなかに死んで台与が後を継いだという話が酷似していることによる。

天の岩戸事件

スサノオは、天照大神とウケイをしたあと、自分が勝ったとあって、天照大神の宮殿を荒らし、そのため、天照大神は傷つき、天の岩戸に隠れた。天の岩戸は石室であり、死んだことを意味するとされている。その後、天照大神が岩戸から出たあとは、おとなしく罪を受けて根の国へ行っている。スサノオを誰に比定するかが一つの解決策となりうる。

天孫降臨を主導したのはタカミムスビ神

タカミムスビ神（高皇産靈尊）は、『日本書紀』本文では、「神代下」の天孫降臨の場面で突然登場する。それ以前に何の説明もない。出自を記していないのである。そして、天孫降臨の場面では天照大神よりも主導的な働きをしているのである。この神のモデルがいたとすれば誰なのか。

神武東遷

初代天皇とされる神武は日向国から出発している。これが謎になっている。神武非実在論が多いが、なぜ、「記紀」に神武東遷の話を掲げたのかの論は見当たらない。

神功皇后と仲哀天皇のなぞ

仲哀天皇の執務した本宮は近畿にはない。『古事記』には近畿のことは全く記されておらず、冒頭に「帯中日子(仲哀)天皇、穴門（山口県下関市）の豊浦宮、また筑紫の訶志比宮（福岡県福岡市東区香椎）に坐しまして、天の下治らしめしき」と、最初から穴門が本宮であると記されている。『日本書紀』でも敦賀や南海道を巡幸中、熊襲が叛いたという報を聞き、穴門へ急行している。近畿で執務を執った本宮は記されていない。また、神功皇后と仲哀天皇は夫婦でありながら、そして神功皇后は天皇ではないとされながら『日本書紀』では、仲哀天皇紀がごく短いにも関わらず、わざわざ、神功皇后紀を別巻に独立してたててある。また、仲

哀の子とされる応神天皇の誕生が仲哀没後十カ月と十日後と通常の出産予定日より少なくとも一か月遅れたことにしている。その理由として三韓征伐中に産気づいたので帯に石を挟んだというのだ。さらに、仲哀の誕生年を仲哀・成務・景行紀から探ると、なんと、父親の日本武尊の没後 36～45 年後に生まれた計算になる。「記紀」は、神功皇后が特別な人物であり、また、ここに系譜上の大きな断絶のあることを示唆していると考えられる。

考古学的事実

纏向遺跡の出現・拡大・終焉

纏向遺跡は、弥生時代には人の住んでいなかった場所に、二世紀末に突然出現したもので、当初は直径 1 km くらいの規模であったものが、三世紀後半にまた突然遺跡の規模が三倍に広がり、そして四世紀初頭にまた突然終焉を迎えるという不思議な経過をするという（橋本輝彦・白石太一郎『邪馬台国からヤマト王権へ』ナカニシヤ出版、2014 年）。そして、纏向遺跡周辺で最初の大型前方後円墳である箸墓古墳が出現したのは三世紀後半であることに現状では異論はない（上野祥史「弥生時代から古墳時代へ」『ここが変わる日本の考古学』吉川弘文館 2019 年）としている。

邪馬台国畿内説は、纏向遺跡の出現と邪馬台国成立を結びつけたものだが、最近の考古学的知見からは纏向遺跡の状況は倭人伝の邪馬台国の状況とは合わないという考え方が有力になっている（橋本輝彦〈前掲〉、関川尚功『邪馬台国大和説』梓書院、2020 年）、坂靖『ヤマト王権の古代学』新泉社 2020 年）各氏ら）。

祭祀具の北部九州からの移動

弥生末期まで近畿地方での祭祀具は銅鐸であり、纏向遺跡の出現から鏡・刀・玉が祭祀具として墓に納められるようになった。これらは、弥生末期、北部九州での祭祀具であった。

鉄の北部九州からの移動

弥生末期まで、鉄製品は北部九州に集中しており、纏向遺跡の出現から近畿でも鉄製品が多く出土するようになった。三世紀後半には鍛冶炉跡も発見されている（橋本、前掲）。

地名の北部九州からの移動

福岡県朝倉市付近と大和（奈良県）に共通の地名が多くあり、その配置も似ている（安本美典〈前掲〉・奥野正男『奥野正男著作集Ⅲ邪馬台国の東遷』梓書院、2012 年）。

検討

上記のことから推理できることを挙げると

台与は豊国皇女ではないのか

台与は「トヨ」と読まれている。「トヨ」は「豊」に通じる。台与は豊国の皇女だったのではないかという考え方もできるのではないかと。上述のように、台与は帯方郡軍師張政によって擁立された。それは、その前の男王に対しての国内の不満に対して事態収拾のために男王に代わって擁立されたのである。そうすると、その男王も豊国王であることが推測される。なぜ豊国王を擁立したのだろうか。豊国は卑弥呼女王の筑紫国の東に隣接している。張政は

豊国を味方に引き入れようとしたのではないか。狗奴国に対して、自軍の強化を図るためである。豊国を味方に引き入れれば、狗奴国に対して軍事的に優位に立てると踏んだのではないか。前述のように豊国は瀬戸内海交易により、栄えていた国と考えられる。九州における支配域も後の豊前のみならず豊後まで広がっていた可能性はあろう。また前述のように豊国は倭人伝上の投馬国であった可能性も高い。

神功皇后

『日本書紀』における神功皇后の年紀は西暦 201～269 年である。ちょうど、倭人伝における卑弥呼と台与の年紀に合わせ、さらに倭人伝の記事を挿入している。もし、卑弥呼と台与がヤマト王権にまったく関係のない九州の女酋であったならば、なぜそのような倭人伝記事を天皇の系譜の中に挿入したのか説明がつかない。神功皇后＝卑弥呼＋台与であるといっているのではないか。しかし、対外交渉記事は朝鮮の『三国史記』と照合すると、120 年ほど後の事件が挿入されている。このことから、神功皇后は、実在したとすれば、四世紀末の人物とするのが通説となっている。

しかし、私は、神功皇后を四世紀末の人物に見せかけたのは、理由があって、一つは天照大神を卑弥呼・台与として描いたので、ここでは神功皇后が卑弥呼・台与であることをあからさまに描きたくなかったこと、もう一つは応神天皇を継体天皇の五世代前に見せかけなければならなかったことに伴い、彼の母である神功皇后も四世紀末の人物に見せかけたと考える。詳しくは、拙稿「継体天皇の系譜はなぜ『記紀』に書かれなかったか」（全邪馬連『私の古代史』）をご覧ください。簡単にいえば、継体天皇の五世代前は応神ではなかったということが、「帝紀・旧辞」編纂時にわかった。しかし、継体天皇は応神の五世孫ということで天皇として認知されているので、これを変えることはできない。そこで、継体の五世代前も応神になるように応神の年紀を伸ばして天皇家の系譜をつくり、継体から応神までの系譜は記さなかった。応神—継体の系譜を省いたのは、真実を示唆する記述も歴史書に紛れ込ませるためである。

タカミムスビの神の比定

天の岩戸から再び姿を現した天照大神は台与と考えられることは既に述べた。天照大神は天孫降臨を行うのであるが、この場面ではタカミムスビが主導的に行っている。そしてそのタカミムスビは『日本書紀』本文では、前述のように、どのような神なのか説明がないのである。このような性格の人物を倭人伝のなかから探すとすれば、軍師として台与を主導したかもしれない張政が最もあてはまると思われる。つまり、張政が倭国で主導的働きをしたとすれば、それは「記紀」のタカミムスビに比定することができ、逆にタカミムスビを張政に比定すると張政は主導的働きをしたということになる。

スサノオに科せられた罪、千座の置戸

ウケイのあと、天照大神の宮殿を荒らしたスサノオだったが、天照大神が再び天の岩戸から出た（つまり、台与に代わった）あとは、おとなしく罪を受けて根の国（出雲）へ追放され

ている。つまり、スサノオを狗奴国とするならば、狗奴国は張政の戦略により降伏したのではないか。追放されたのは、その官とされる狗古智卑狗であろう。張政の戦略については後に考察する。

その罪の第一は「千座置戸」である。「千座置戸」とは何か。日本国語大辞典には「ちくらのおきど＝昔、祓(ハヒ)の時、罪のけがれの償いとして出す多くの品物」とある。「多くの品物」とは何であろうか。天照大神とスサノオの抗争、これが倭人伝の女王国と狗奴国との抗争であり、狗奴国が降伏した結果の賠償を指すものなら、それは小さいものではなからう。祓いの品物を高く積み上げたくらいで済むはずもない。私は、千座置戸＝多くの米蔵＝領土の割譲、と連想して日向国の割譲ではないかと推察した。狗奴国が現在の肥後（熊本県）、および日向（宮崎県）を領有しており、狗奴国の降伏条件として、日向国の豊国への割譲があったのではないか。

女王国（筑紫国）と狗奴国の抗争経過

台与を豊国皇女と想定すると、張政の戦略が見えてくる。張政の使命は狗奴国を降伏させることである。しかし、来倭した時点では、女王国は狗奴国に対して劣勢であった。それを短時間で優勢な状況にするにはどうするか。その常套手段としてあるのが、他国との同盟である。張政は魏の曹であるから、かつて呉が蜀と同盟したため、赤壁の戦いで魏が大敗を喫したことは何度も聞かされていたことであろう。張政は自軍の強化のために東の隣国の豊国を味方につけることを考えた。狗奴国との戦争のために同盟するのであるから、大きな報酬がなければ、豊国は乗れる話ではない。張政は切り札を出した。女王国と豊国を合併し、その王に豊国王を迎えるというものだ。張政としては、女王国内に王に為すほどの人物がいな（そのために卑弥呼を女王にしている）ので、女王国内を説得できると思っていた。ところが、女王国の諸侯（連合を組んでいる小国〈クニ〉王たち）の中には、さすがに、主権が豊国へ移ることになるので、反対する者が多数生じ、内乱になって、千人の死者を生じる事態になってしまった。そこで、張政は、豊国王の代りに豊国皇女台与を祭祀王として迎え、政治は女王国側諸侯と豊国王の合議制で行なうことにして、事態を収めた。

張政の戦略は、あくまで、孫氏の兵法に則り、戦争を避け、交渉によって狗奴国を降伏させ、味方に引き入れることである。張政は女王国が豊国と合併したことを狗奴国に喧伝し、また、張政の実力を見せつけるために、台与をつれて、新羅にわたり金銀をせしめた（『三国史記』新羅本紀 249 年「于老、倭人に殺さる」の事件にあたる、拙稿「邪馬台国と狗奴国はその後どうなったか」全邪馬連『私の古代史』2021 年参照）。狗古智卑狗（スサノオ）は、女王国が豊国と同盟したため、軍事勢力は劣勢になり、拠点の鞠智城（熊本県菊池市）を東の方から攻められるおそれが生れ、また、帯方郡から派遣された軍師の力量のなみなみならぬことを見て、狗奴国がきわめて劣勢になったことを悟り、和睦交渉に応じることにした。

張政が示した和睦条件は、①本土肥後（熊本県）は安堵する。しかし、②日向国は豊国に割譲すること。③狗奴国軍の将軍、狗古智卑狗を国外追放すること。追放先出雲の征服建国は許す。（後に、出雲を征服した狗古智卑狗にたいして、そこに産する鉄ほしさに、国譲りを強要したので、大きな怨みを買うことになった）。④人的交換をすること。狗奴国から女性三人

を人質として豊国へ、豊・筑紫連合国から男子五人を狗奴国内各クニへ婿養子として派遣し、そのクニを引き継ぐこと、である。狗奴国としては、戦争をしても勝てる見込みがないので、やむなく了承した。日向国を豊国のものとしたのは豊国への報酬である。

張政は、このようにして、筑紫・豊・肥国の統一を完成させ、帰国の途についた。三国の王となった台与が二十人もの将を張政に付けて中国の臺（皇帝の宮殿）まで送った。張政としては、その成果を皇帝に認めてもらわねばならない。そのため、台与の将たちに証言してもらう必要があった。台与側としても、お礼をしなければならぬし、卑弥呼を継いだ女王として正式に「親魏倭王」に任命してもらう必要があった。

豊国王のその後

卑弥呼の後に王となった男は、豊国王と比定できる。そして「記紀」の中では、仲哀天皇と比定できる。仲哀天皇は住吉神（張政に比定される）の新羅侵攻に反対し、まもなく崩御した。豊国王は、筑・豊連合国の王を退いても、豊国王ではあったわけで、豊国王は武断派であったのであろう。何とか自分も功績を挙げたいと熊襲（狗奴国）への武力攻撃を繰り返した。それは、自軍優勢の状況で和睦ということを考えている張政の方針とは異なるもので、張政にとっては、豊国王はわずらわしい存在になっていき、やむを得ず排除することにした。「記紀」ともに、仲哀天皇は、神託を信じなかったので神の怒りを受けて、まもなく没している。

『日本書紀』の一云に「熊襲の矢に当たった」という記事があるが、福岡県小郡市には仲哀天皇を主祭神とする御勢大霊石神社があり、ここで仲哀天皇が毒矢に当たって亡くなったという伝説を残している。おそらく味方（筑紫軍）の矢であろう。

天孫降臨神話

割譲された日向国への豊国皇子の派遣が「天孫降臨神話」として記述されていると見る。肥国の別名は「建日向日豊久土比泥別」と『古事記』にある。熊襲は「建日別」ということから、その字面を眺めると、「日向を豊国に譲った建日別（熊襲）」という意味を表しているのではないかと思えてくる。肥国は和睦併合されるまでは熊襲であり、日向を豊国に譲って併合されたあとに肥国という名に変わったと考えられる。

天孫降臨は豊国皇子ニニギのみが降臨したのであって、高天原が遷都したわけではない。ニニギは割譲された日向国の統治のために派遣された皇子とみられる。そして、史実はニニギ＝神武天皇と考えられる。ニニギから神武まで四代、「天孫降臨から 179 万 2470 年になる」という『日本書紀』の表現は、神代の時代を極限まで繰り上げて表現したものと考えられる。

豊前国風土記の逸文に「豊前風土記に曰く、京處郡 いにしえ 天孫ここより発ちて、日向の舊都に天降りましき」とあり、天孫は豊前より海路日向に天降ったと伝えている。

神武東遷とその時期

魏志倭人伝において、帯方郡から派遣された張政は「記紀」の記事から推測すると、前述のような活躍をしたと考えられるが、その一連の経過はそれほど長い時間ではなく、おそらく一年内外の時間で達成できたものと考えられる。台与は張政の帰還にあたり二十人もの将

をつけて、中国の皇帝に拝謁し、卑弥呼を継いで、「親魏倭王」の任官を得たものと推測される。そして、倭国の安定のために、東方の倭種の国の統一を促されたのではないか。また、台与が豊国にとどまっていることは、豊国王にとって何かと目障りだし、隣国の筑紫国にとっても親魏倭王の座を奪った台与は面白くない存在である。台与は九州に居づらくなったのではないか。そこで、台与は、大和纏向の地が栄えつつあることに目を付け、そこに都を遷すことを目論んだのではないか。豊国が瀬戸内海交易を生業とした交易国家であって、遠く越の国のヒスイなどを得ていたとすれば、倭国の中心が近畿であることは認識できたと考えられる。そこで台与は、瀬戸内海各地を支配している国王たちに、自分が「親魏倭王」であることを宣伝し、自分を祭祀王とする連合国家の形成を呼びかけた。つまり、各国王のその領地内での支配に関してはそのままであって、日本列島の外に対する対外国交渉は倭国内が連合して事に当たる、その代表として「親魏倭王」の台与が就任するというものだ。

台与は、日向に派遣していた神武に、今度は大和を征圧し、その地に都を建設することを命じたのだ。それは250年代のことと考えられる。考古学的には、三世紀初頭に出現した纏向の都が、三世紀後半に、その範囲が三倍に急拡大したちょうどその時期にあたる。『日本書紀』には、神武は「塩土の翁に聞くと『東の方に良い土地があり、その中に天の磐船に乗って、とび降りた者がある』と。思うにその土地は、大業をひろめ天下を治めるによいであろう。この国の中心地であろう。そのとび降ってきた者は、ニギハヤヒという者だろう。そこへ行って都をつくるにかぎる」といったとある。神武東遷の前に纏向の地を開拓した者がいたことを示しているのである。

神武は日向国を出立して、豊予海峡で案内人珍彦を得、宇佐により宇佐津彦・宇佐津媛（台与と考えられる）に会った。その後遠賀川河口の岡湊に寄った。おそらく、兵を集めたのであろう。その後、安芸国を経て、吉備国へ移り三年間（『古事記』は八年間）、船、兵器、糧食を整えた。吉備国は友好国であることがわかる。その後、ヤマトへ進撃し、苦難に遇ったが大和の纏向の地に都をつくったので、その都の規模は一気に三倍になった。

神武を初代とするヤマト王権の統治

神武は台与の要請によってヤマトの地を統治することになった政務を執る王である。中国皇帝から認証された「親魏倭王」ではない。親魏倭王は台与であり、継承するのは台与の子孫なのだ。また、神武は九州の豊国王ではない。豊国には別の王（張政に暗殺された男王の子孫）がなっていたはずである。いわば、神武のヤマト王権は豊国からの分家独立のような形になっていたと考えられる。ヤマト王権は豊国にその源を持ちながら、その初期において、九州北部との密接な交流の痕跡がないのは、そのためと考えられる。神武の大和の地での業績は、通説のとおり、崇神天皇で表されているとみている。

そして、266年台与は魏を引き継いだ西晋に朝貢した。

纏向遺跡

纏向遺跡の出現は、ナガスネヒコとニギハヤヒによる交易都市、つまり大市、物流センターの建設ではないかと思う。橋本輝彦氏〈前掲〉が示唆されているように、鋤という農耕具

が発見されず、都市建設に必要な溝（運河）造営の鋤ばかり見つかるという現象、実際に運河と思しき幅6mもある直線の大溝、大きな建物、これは祭殿と見られているが、交易都市であっても当時は、祭祀施設は必然である。そして各地から持ち込まれた土器類、そして、なにより「大市」という地名が残っているのである。

私は、二世紀末の倭国乱の原因の一つに南海トラフの地震を考えている。元通産省地質調査所勤務の寒川旭氏（『地震の日本史』中公新書 2011年）によると、黒谷川宮の前遺跡（徳島県板野郡板野町）ではV期末（西暦200年前後）の大きな砂脈（地震による液状化の痕跡）が見られたという。また高知大学の岡村眞教授は二千年前の50センチに及ぶ津波堆積物層を土佐市で発見されている（2014年5月16日、日本経済新聞）。南海トラフの地震は大きな場合は瀬戸内海全域や東海地方にわたり数mの高さの津波になることが予想されている（2012年内閣府発表）。この時の津波が巨大なものであったとすると、瀬戸内海沿岸や東海地方の田地は津波に襲われ、一瞬にして、米という食糧を失うことになる。津波に襲われた田は塩分が残るので、その後数年は米の収穫が激減するのである。食糧不足による内乱が起こるのは必然なのである。考古学的にも高地性集落の発生は津波の経験から高地に居住地を移した（元の居住地から2、30m高地の例もある）と考えられ、また倭国乱は他からの侵攻ではなく、近隣同士の戦いであったことが示されている（寺澤薫『王権誕生』講談社学術文庫2008年）。

纏向の地に大市を建設したのは、津波の来ない地に東海と瀬戸内の交易者たちが共同で設立したのではないかと推測できるのである。

成務以前の天皇は政務王

神武は台与の子孫ではなく、祭祀王を継ぐ天皇家ではない。しかし、大和の地にヤマト王権を設立した政務王であり、その子孫は大和の地を統治したと考えられる。そのため「記紀」編纂では、ヤマト王権成立の歴史を語るに省くことのできない王統であった。

したがって、この王統の記述（系譜）を九州での出来事（神代で表した）からヤマト王権設立のところで行ない、そのあとに台与（神功皇后として表す）から続く祭祀王の系譜をつないだと考えられる。ここで、成務の後に天皇になったイザサワケを気比の神との名の交換という逸話を挿入して応神に替え、イザサワケの事績も応神に加え、神功皇后（台与）の子の応神天皇を継体天皇の五世代前に位置づけした。そうすると年紀上、応神の年紀が異常に長くなるので、「仁徳天皇」という架空の天皇（在位87年間）を挿入した。だから、応神・仁徳天皇の事績から、仁徳・応神元一人を二人に分けた（直木孝次郎『直木孝次郎古代を語る5大和王権と河内王権』吉川弘文館2009年）や仁徳王朝の始祖として応神を作為した（吉井巖『天皇の系譜と神話1』塙書房1967年）などの説が生じているのである。私は、このイザサワケが台与から続く系譜の王だったのではないかと考えている。つまり「仁徳天皇」には幾世代かの祭祀王が含まれ、その最後がイザサワケ（仁徳紀で八田皇女を皇后に立てた人物）だったという考えである。

そして、この構成は、ヤマト王権成立の時期を非常に古く見せかけるためにも役立った。